能「邯鄲」

「邯鄲」（かんたん）について

「一炊の夢」「邯鄲の枕」を舞台化した曲です。能というと幽霊が出てきて…、というイメージがあるかもしれませんが、この曲には出て来ず、夢のなかで不思議な世界が繰り広げられます。舞台進行も華やかで筋もわかりやすいので、初めて能をご覧になる方にも楽しんでいただけやすいのではないかと思います。
上演時間は90 分ほどの予定です。

○舞台展開

アイ[邯鄲の宿の女主]が邯鄲の枕のことを話す（狂言口開）→**シテ[盧生]**が現れ（次第）羊飛山へ行く旨語り、蜀の国を出発する→幾日も旅を続け、やがて邯鄲に着く（道行）→一夜の宿を求めアイと問答→邯鄲の枕で一眠りをする→程なく**ワキ[勅使]**が盧生を起こし、楚の国の王位に就くことになったと告げ、**ワキツレ[輿舁（こしかき）]**2人に挟まれ輿に乗った態になり宮殿に行く→**子方[舞童]**、**ワキツレ[臣下]**らがシテの前に居並ぶ（来序）→宮殿の有様などが地謡に語られる（クセ）→子方がシテに酌をし、舞を舞うと、シテも舞を舞う（楽）→なお栄華の有様を語り舞うが、突如すべて消え失せる→アイに粟のご飯が炊けたと起こされる→しばらく呆然とするが、人生はわずかな夢に過ぎないと悟り、枕に感謝し、望みを叶えて帰っていく

「邯鄲」をご覧になる上でのポイント

① 能面

この曲は登場人物は多いものの、面を掛けるのはシテ１人です。面の名前はそのものズバリ**邯鄲男**（かんたんおとこ）といい、眉間の皺が特徴的な青年の表情をしています。この面は「高砂」の後シテ住吉明神や、「養老」の山神など若い神様の役にも多く使用され、悩める青年が、悩みなどは超越した神様にもなるというのはなんだか不思議です。

② 装束・小道具・作り物

シテは着付（ざっくりいうとインナー）に**厚板**（あついた）を着込み、**法被**（はっぴ）という袂の大きな着物を上に羽織ります。特徴的なのが**掛絡**（から）で、「仏道をも願わず」という台詞がありながら僧衣をまとっています。頭は**黒頭**（くろがしら）というボサボサとした黒髪です。下は**半切**（はんきり、またははんぎり）という大きな袴を履きます。

この曲では途中で引っ込んで着替えるということはありませんが、王位に就く場面で掛絡を取ります。また舞を舞うときには法被の右袖を脱ぎ、丸めて背中のほうに突っ込んだ状態になります。修羅物の扮装でこの右袖脱ぎ（右肩脱ぎとも）はよく見られますが、大きな袂が無くなるため、指先の自由が利きやすくなり、袖アシライもしなくてすみます。

小道具は、左手に**水晶数珠**を、右手に**唐団扇**（とううちわ）を持ちます。数珠は掛絡を脱ぐタイミングと同じくして手放します。唐団扇は軍配のような形をしていて、通常使う扇よりもだいぶ大きなものになります。「張良」や「枕慈童」など中国を舞台としたもので多く使われます。

いわゆる大道具を能では作り物といいます。ただし小道具との境は曖昧で、以前これを定義づけようと試みましたが、どうにも上手くいきませんでした。本曲で使われる主要なものは、**一畳台**（いちじょうだい）、**引立大宮**（ひきたておおみや、大屋台とも）、そして**枕**です。枕は大きさとしては小道具ですが、終始手にしているわけでもなく、謡本にも作り物として分類されていました。これがなくては「邯鄲」は始まらないとても大事な物です。ティッシュ箱を 2 回りくらい大きくしたもので、紺色の布が張ってあります。「枕慈童」で使われるほか、実は「小鍛冶」の金床でも流用しています（他の流儀がどうかは知りません）。一畳台はその名のとおり大きさ一畳ほどの台で、飛び乗ったりしても大丈夫なように頑丈にできています。舞台では台に**台掛**（だいかけ）という布を掛け、2 人がかりで持ち運びをします。引立大宮は一畳台に取り付ける四本柱と屋根のことで、一畳台の上にペシャンコにした状態で持って出て、舞台上で台の四隅の穴に柱を通して組み立てます。簡単なようですが、組み立てる２人の息が合わないと上手くいきません。大宮というからには小さい宮もあります。小宮とはいわず普通に宮といいますが、「竜田」や「楊貴妃」で用いられます。

また、宿に着いた際に腰掛として出される黒い円筒形の物は**髻桶**（かずらおけ、床几とも）といい、最もよく出る作り物です。宮殿へ行くときにシテの両横からワキツレがかざすように持つのが**輿**で、この姿は輿に乗っていることを表します。「蝉丸」の蝉丸、「花筐」の天皇など高貴な役柄に使われます。

③ 謡

１人の人物でありながら、気持ちの変化が大きく、これを謡で表現していくのが、非常に難しい一方、また腕の見せ所でもあります。前半はおとなしく、特にアイとの会話はかなりトーンを下げた謡になります。王位に就くと威厳のある謡になり、長い夢から覚めたときの声はまた変わるといった目まぐるしい変化がありますが、あまり芝居がかっても能の魅力

を損なうので、この塩梅が非常に難しいところです。この曲一番の難所が激しく舞った後、夢から覚めたあとの第一声「盧生は夢覚めて」で、囃子方も何も演奏しないシーンとしたなか、息が上がった状態で静かに謡い出すのは相当に難しく、ここをクリアできるよう必死に稽古を重ねています。

謡はすべて古語である上、独特の節回しで謡うため一度耳で聞いただけで意味を理解するというのは至難の業です。全詞章を添付致しましたのでご参照いただければと思います。なおこれに関してひとつお願いが。出来ましたら先に目を通しておいていただいて上演中は確認程度にしていただければと思います。

ご覧になった方から謡の意味がよくわからないと言われることがしばしばあります。確かに詞章をご覧いただくと、序詞・掛詞といった古典の授業で習った技法が多く含まれ難解な部分が多いかと思います。しかし能のストーリーというのは至極簡単で、筋の展開を楽しむというより、動き、音、間といった僅かなものの積み重ねを流れとして体感していただけることが、能を「楽しむ」近道なのではないかと私は思っています。能にはここは必ずこう意味するとか、こう感じなくてはいけない、というような制約は全くありません。例えば絵画を見るように、ご自身の感覚を目一杯に開いてご覧いただいて、終わったあとに何かが心に残りましたら、演者としては嬉しい限りです。

④ 所作

前半は静かに進み、あまり大きな動きはありません。この曲で特徴的なのが寝る所作です。「猩々」などでも寝るという所作はあり、扇を左手に持って顔を隠し俯くような動きをするのですが、「邯鄲」では実際にゴロンと横になってしまいます。この動作はもちろん初めてで、ゆったりと起き上がるのに苦戦しています。

後半は動きが多くなり、みどころも多くなります。玉座に見立てた一畳台の上で舞う楽は、通常三間四方で舞うものを一畳の広さで舞い、かつ四隅には四本柱が立っている状態ですから舞えるスペースは相当に狭くなります。これを窮屈さを感じさせることなく舞わなくてはなりません。

途中でこの一畳台を降りますが、降りる前にハッと足を踏み外すような〝空下り〟（そらおり）という型があります。これは夢と現実の狭間の表現だとか言われますが、こういう意味の型であるという教えは特にないようです。自分の中でよく考えて当日の舞台に上げたいと思います。

そしていよいよ夢が覚める場面。橋掛りから一気に駆け込み、一畳台の前で左袖を巻き、飛び込んで寝転がります。各流ともこの型はあるそうですが、能に詳しい黒澤明監督は金春流のこの型がお好きだったそうです。

夢から覚めてからはしばらくはあまり動きませんが、激しく動いた後にじっと動かないのはかえって辛いものです。そして最後に何か悟ったということを表現し終曲となります。

⑤ 囃子

能の囃子は笛・小鼓・大鼓・太鼓の四拍子があります。太鼓の出番は中盤から後半に掛けてとなります。

謡と囃子は一見するとそれぞれ勝手にやっているように見えるかもしれませんが、実は拍数などがかなりキッチリ決まっていて、ヨーとかホーといった掛け声は音楽的な要素以外にその拍数をお互いに確認し合うためでもあるのです。その中でさながらジャズのように、それぞれが自分の主張を出しつつ、また相手の想いを感じながら舞台は出来上がっていきます。

シテは**次第**（しだい）という演奏で登場し、常座（じょうざ：橋掛りから舞台に入ってすぐのところ）で斜め後ろを向いて三句ほど謡います。ちなみに次第ではその後地謡が地取（じどり）といって小声で繰り返しますが、これは理由はよくわかりません。有力な説は地謡の発声練習だそうですが、果たしてどういう経緯で作られたのでしょうか。

突如王位に就くことになり、それまで寝台だった一畳台が玉座に変わる場面で、シテが一畳台に向かうときに演奏されるのが**真ノ来序**（しんのらいじょ）で、ここで一度太鼓が登場します。ゆったりとした荘厳な雰囲気となります。

シテが台上で舞うときに太鼓入りで（入らない曲もあります）囃されるのが**楽**（がく）で、足拍子（足踏みをして床を鳴らす）が多い舞です。雅楽をもとにしたようですが、あまり共通点はみられません。なお能で楽という言葉が使われれば雅楽を指します。「邯鄲」の場合、最初の部分（カカリ）が〝邯鄲ガカリ〟といって通常より少し長くなります。また台から降りるときも通常より長く演奏されます。ただし適当に延ばす訳ではなく、シテの型を見て囃子方が判断するので、シテとしてもよく囃子を聴いて演奏しやすいように動かなければなりません。

＊　＊　＊

見どころが多い曲ですが、舞台に出たら出っ放し、この曲にしかない所作や、囃子事など演じる側にはかなりの体力・技術が要ります。夏は舞台も少ないので今必死に稽古に励んでいます。なおこの曲には子供の役である子方（こかた）が登場します。今回は先輩山井綱雄師のご長男綱大くんに出てもらうことになりました。非常に可愛らしい美少年ですが、こちらも食われないよう頑張って勤めたいと思います。

シテ方金春流能楽師
中村　昌弘